

白河古事考

五

京都府所屬白河縣

御禮

秋山文川
3-135
6

白川古事考卷之五

古墟



一 搦目村城跡結城宗廣居ル 皇子義良北畠頭家
 同頭信毛暫ク此ニ入玉ヲ光明寺殘篇ニアリ古
 ノ白川城ト云ハ是ナリ今ノ白川ハ小峯城ナリ
 永祿年中小峯氏カ白河ヲ棄ヒニ時ヨリ廢セシ
 墟ナルヘシ臣嘗テ宗廣親光カ為ニ其忠壯ヲ感
 シ 定信公ノ三大字ヲ請奉其下ニ文章ヲ綴リ
 古墟ノ北崖石壁ノ半腹ニ彫ル



鬱然深秀在我白川東者結城氏墟也我望
之而有所感焉元弘建武間士氣衰萃天下
擾々視利避就宗廣親光忠烈凜々憤發唱
義欲率天下而與之不幸弗克以殞身然東
州士民知戴

南朝之天者亦其力也一時忠烈楠公之外
無能耦焉而今吾民鮮知其為州人奚以興
于餘風內山重濃家於墟下捐財為予勒銘
表而出之

公嘉斯舉題賜三大字以刻上方嗚呼二子

之忠魂教世後得此帶標焉其必含笑於地
下吾輩亦與有榮焉銘曰

峭乎此山維石巉々溪風肅然劍佩夜還踪
跡不刊輝映千年民莫自棄國能生賢

文化三年 廣瀨典識 賀啓書

一菅生館掘目古墟ノ西ニ下夕ル山ニ在リ菅生傳
右衛門ト云者ノ墟也結城ニ菅生氏多シ年代詳
ナラス

一舟田村ノ城跡廣廿ニ下四方許空墟下リ結城ノ
旗下常松園入道ト云者居ク天文年中石川郡龍

崎村館主須田紀伊守岩瀬郡須賀川也カニ男松
五郎ト云者ヲ舟田善左衛門カ養子トス天正十
七年舟田入道真海園物語ニ舟田入道真海トアリ其
子典十郎友繼岩瀬郡大里村ノ城ヲ伊達政宗ニ
從テ攻ムル此城跡ノ下大隈川ニ入道淵ト云所
アリ何ノ頃ニヤ有ケン城主舟田入道ヲ敵ノ急
ニ攻タルト有リシニ防戦利タクノ自ラ淵ニ投
テ死セシトアリシ其ヨリ此所ヲ入道淵ト各付
トナリ

一同村小字石目木ト云所ニ結城ノ臣石目木修理

亮居ル修理亮忠死實ニ古人ニ耻サル事ナリシ
結城義親ノ条下ニ録ス

一田島村結城宗廣ノ弟田島與七左衛門廣亮館迹
アリ其子ヲ田島信濃ト云数世ノ後ヲ田島信濃
守景久佐竹ト戦々ノ討死ス景久ノ時此墟ニ於
テ大蛇ヲ害ノ北面ノ崖ニ埋ノ櫛ヲ植シトテ龍
害ノ館トモ云ト也今ニ古木ノ櫛アリ蛇ノ害セ
タリト云云景久ノ子田島信濃守ハ
結城義親カ白河修理大夫義頭ヲ害セトセシ
テ救ヒシニ因テ義親ノ為ニ攻迫ラレ自ラ城ニ

火ヲカケ打テ出切死ス其以後城廢ス信濃守景
久ヲ法戰^道閑ト云フ田島村清光寺ニ位牌ヲ存ス
清光寺ニ古碑多シ字皆煙没ス白川地石ヲ出ス
ト多ケレ共至テ麓患只清光寺ノ碑ニ限ルニ非
ス双石村坊ノ入松林菴ノアト嘉曆二年ノ字ノ
ニ存スル碑アリ亦此ノ類ナリ惜ムニ堪ヘス
一借宿村新地山ハ石井丹波ト云人ノ館跡ナリシ
トソ天正ノ始ヨリ佐竹氏シハ白河ヲ攻此路
筋ヨリ兵ヲ出セシニ結城氏ニテ此墟ニ大塚宮
内左衛門尉ヲ置キ大隈川ヲ隔タル木ノ内ノ館

ト呼應メ防戦シタリシ宮内左衛門尉始ハ同郡
槁羽黒ノ館ニ居タリシカ攻落サレテ関和久村
ニ潜リ居タリシヲ此城ヲ結城授テ防キシト也
宮内左衛門尉ノ子同佐太郎ハ佐竹ヨリ白河ヲ
攻シ時ニ加勢トメ大勢ノ内へ切入テ戦ヒシカ
誤テ今波多下ト云所ノ深田へ馬ヲ驅落シ逆モ
不叶ト覺悟メ敵モ味方モ能聞キ候得武士ノ戦
場ニテ叶ハヌ時ハカクヨリ仕候ヘト午本ヲ見
セ置候ヘシトテ腹カキ切テ死タリ又其弟小十
郎ハ天正十八年岩瀨郡大黒ノ城主矢田野阿波

ヲ攻メシ時ニ伊達政宗朝臣ノ催促ニ應メ結城
義親ヨリ小十郎ヲモ加勢ノ衆ニ加ヘテ遣リシ
カ大勢ト戦不叶時ニ及テ兄ニ不効キメ家名ヲ
揚テ討死シタリ其弟甚九郎モ度々戦功ヲ顕セ
シカ結城家没落ノ時ヨリ関和久ヘ引籠リ農夫
トナリ子孫今ニアリ其弟小八郎合戦坂ノ軍ニ
功ヲ顕シテ後今白河町年寄大塚半左衛門先祖
タリ

一本沼村ノ南羽黒ト云館ハ義家朝臣奥州下向ノ
時人馬調練ノ爲ニ暫此ニ滞留アリシト云結城

ヲ侵メ佐竹勢大隈川ニ傍ヒ攻登リ遂ニ此館ヲ
モ攻落セシト板橋農家ノ旧記ニアリ館主ノ姓
名傳ハラス

一同村民家ノ地半ヨリ北ハ空堀ヲ回ラシ居ル館
迹ト云誰氏ノ居ト云テ詳ナラス天正ノ頃結城
旗下ニ本沼下野守アリ此人ノ館迹ナラシ

一泉崎村ノ墟方九十間ホト結城ノ臣邊見又人見ト云

主膳正居住天正十六年石川郡中畠城上野介ニ
男右馬頭ヲ家督ニ約シケルニ主膳正兄下野國
鳥山ノ城主何某ヘ告テ知スルニ他族ヨリ家督

迎ル下然ルヘカラストテ許容セサリケルハ中
畠上野今是ヲ聞テ大ニ怒リ急ニ軍勢ヲ催メ泉
崎ヲ乗取ケル左レ共一度子ノ為ニ父ト定メ又
レハ主膳正ヲ助ケ別所ニ押籠置タリ今其所ヲ
殿ノ入ト云テ小字ニナル其時ノ家老富窪ト云
所ニ小林筑後根岸ニ野崎筑前枉内ニ三村若狭
中ノ内ニ鈴木若狭ト云テ村ノ中四ヶ所ニ居ニ
ト也

按野鳥山ハ那須家累世ノ居城ニノ中頃他
家ニ奪ル、下ヲ聞ク佐竹ノ臣ニモ人見主膳

ト云人アリ此人若シ泉崎ノ主膳ト兄弟力又
同時ニコレ無ク同シ主膳ヲ名乗シモ知カク
シ佐竹ハ那須ノ地ヲ攻取鳥山近ク迄鎮セシ
故人見テ其迹邊ニ置キテアリシヲ誤テ鳥山
城主ト云ヒシヤ未タ詳ナラス

一関和久村伊賀館熊田伊賀居ル結城ノ老臣タリ
忠氏ト名乗ル子孫若狭助兼氏アリ関物語ニハ
熊田典惣左衛門光行後若狭ト号ス佐竹勢後切
ノ時河東田上從今高田玄蕃高橋安藝守等ト鳥
峠ニ忍居テ功ヲ顯スト也此始終未タ詳ナル下

ヲ聞ス

一同村上野館廻リ三丁餘四方ニ隍迹アリ館主詳

ナラス會津四家合考義親園和久ニ城ヲ築キ伊

此城ナ

一同村西端館迹アリ家田刑部正居住ス

一同村戌亥ノ方館迹一ヶ所アリ東西一丁餘溝迹

アリ結城ノ臣加東田上總介家治居住ス

一同村木ノ内山館佐竹氏結城ヲ攻ル時此ニテ防

キニテ古記ニ見ユ

一大和田村小屋カ上ノ館ハ山上ニ空堀ヲ遠テシ

中央石ヲ甃ミ竈ノ如キ跡アリ白石出雲守館迹

ト云此人ノ年代詳ナラス永禄頃白石刑部大輔

此ニ任ス今石川郡内白石村ニ住セシカ石川昭

去テ此地ニ刑部大輔ニ任シテ南郷ニテ佐竹ト

ノ戦ヒ淺川ニテ石川ノ臣淺川次郎左衛門トノ

戦ニ見ユ永禄三年遂ニ新城ノ合戦ニ討ル共子

孫有ヤ無ヤ聞ハス其時ヨリノ廢墟ニヤ

一新小蓋村ニ新小蓋雅樂頭蔦綱ノ墟東西一丁南

北四十間永禄三年新城ノ新城備後守源田源次

郎白川結城ヲ叛ヒテ岩瀨郡ノ二階堂ノ旗下ニ

屬大結城晴綱怒于萬綱ヲ大将トノ白石刑部大
輔ヲ先陣トメ新城須田ヲ攻メ此時白川勢打負
テ白石ハ保土原江南齋力從兵小松源六小松新
次力為ニ討ル萬綱ハ鎧ノ隙ニ矢三筋ヲ負テ引
退ク其疵ノ為ニ終ニ死ス此村ノ石雲寺ノ山後
ニ萬綱ノ碑アリ後人ノ建所ナリ石雲寺ハ新小
蓋氏ノ建ル所ナリト云フ

按保土原江南齋ハ岩瀬郡保土原ニ居スニ階
堂氏ニテ代々此地ヲ有ツ父兵部太輔行有ハ
和歌ヲ善セシ人ナリ江南齋ハ左近行藤ト云

三人ナリ須賀川落城ノ後伊達政宗へ屬シ朝
鮮陣へ赴キ大坂陣ニモ功アリ其事ハ系譜ニ

詳ナリ

一三城目村鷹巢館往古伊藤大學ナリ者知州ヨリ
来リ館主ナリ今村長ノ伊藤某ノ先祖ナリ其家
用ル因テ考ルニ安積郡ハ文治五年工藤左衛門
尉祐徑ニ賴朝卿賜ヒシヨリ安積郡村ニ伊藤
氏中乘ルテ他姓ハ此郡ニシテカリ安積郡村ニ
然ラハ大學道表監積達吉館弁等ヲ見テ知ヘシ
安積ノ内ヨリ来リ此城ニ来リ任スルナリ隣御ノ石川
郡中畠ノ上野外晴辰永祿年中ニ此ヲ攻取ル天
正十八年白川結城没落後慶城トナリ晴辰ハ結

城ノ家ヲ継ヘキ一ヲ避テ中畠ヘ養子トシ小
シ継キ小田原陣ヘモ義親ニ出テ太閤ヘ謁シ候
ト進メ謀アリ義モアリニ人也義親ノ為ニ石川
昭光ヘ千番シ心ヲ主ノ為ニ盡シ又水戸結城ノ職ニ
始未思フニ与陸有ク地ノ人住説云地ノ和
之儀昭光ノ以中讀ノ変遷新換接以定以
之月以迄毎事口味ニ与有ク在切ニ
板押一昨九款方、既為ク以ノ旨及是遊
計前昭光ノ中存可曾一札紙多ク有テ造

泉ハ昭光ノ
非館在所

作只今泉ノ江右他何以計上調議
候燈是處ノ一及お誘ひノ儀ノ

通子

以め及四條ノ南西津ノ

之討捕檢所のお心ノ

説書

卯ノ下

不祝也

結城義親也

中島上野守

一

一

一

一同村ニ陣ヶ岡館 御藏地館 和田ヶ館 古館
澤尻館 小松館等アリ館主皆詳ナラス
一長坂村小館山ノ館安良勤ヶ由ナル人住ス羽太
村大龍寺ノ由緒ニ長福寺殿大安吉龍ト法号ヲ
云トナリ此人年代事跡不詳
一柏野村館迹和知迹江ノ住ス白河結城ノ臣
一鶴生村ノ小名高助ニ結城ノ旗下斑目信濃守則
常ノ館迹アリ岩瀬郡泉田村庄屋斑目氏ノ由緒
ニ源頼朝公ノ御子結城家ハ養子トナリ参ラル
時鎌倉ヨリ附添ラル、四天王ノ随一斑目越

後守ノ末葉増見村ノ城主斑目信濃守後ニ鶴生
ノ館ニ平ス法号ヲ斑宗寺殿心翁浄位ト云今ノ
斑宗寺ハ此人ノ位牌納所ナリトソ十郎廣基ノ
父ナリ廣基別ニ南郷ノ城ニ居レリニ男越中後
ニ泉田ノ庄屋トナル
一米村館迹アリ館岡入道ト云人住ス年代不詳
一小田倉村西平野ニ館迹アリ事實不詳結城歴代
事實ノ部ニ載タル芦谷盛氏那須ト合戦ノ時ノ
館迹ナルハニ共側山ノ懐ニ岩山アリ喚リ石ト
ナリ此方ニ喚ハ彼方ニ答ナル所アリ其合戦ノ

時モ矢叫ノ聲此ニ響キテ夥ニ夕聞ヘシナリ
一飯土用村ニ高德清光ナル者ノ館迹アリ其人ノ
事不詳

一増見村館迹和知駿河守一慶居ス永正年中ニ討
死セシ人ト云フ源姓實名ハ朝昌法名福正寺殿
圓山大鏡今其村ニ正福寺ト云寺アリ鶴生ノ高
助ニ載タル斑目モ此村住セシハ和知ト前後ナ
ラニカ詳ナラス

一下羽太村館迹ハ結城ノ臣南大膳ト云人住セリ
一小田川岩久保切岸館結城治部大輔義顯白川城

ヲ義親ニ兼取レシ後ハ此ニ居ス又一ヶ所殿上
ト云モ居タリトモ言傳フ
同村山館館主年代不詳

一雙石村館迹結城ノ臣本名佐藤大隅守忠胤居ル
後ニ雙石駿河守共云関物語ニ此人上方ヨリ武
者脩行ニ来リシヲ晴綱留メテ軍師トストアリ
今子孫雙石村庄屋タリ伊達政宗ノ文書白河町
商家ニ傳フ

無多ク為仗者當隆ト云クハ理不有
池走有子建詰答為悦ニ斗依ニ存
外好中流以爲仗者云々為亦及ニ物様

高田屋伊兵衛ノ藏

但佐之南江にまき本領あまや

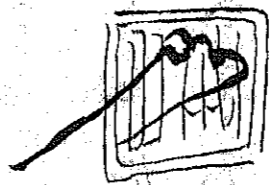
五重ノ并主他に斗まきしうりあき

上を即ち中の備あまはる者おあき

に斗まきの因とて返まきおあき

は年お下りあき

天正七年に松のまき



義親ノ不説齋ノ印

高田屋伊兵衛

棚倉近野
丁ニヤト云地
アリ

一金井館ハ佐竹ヨリ高野八郎兼貞ト云者ヲ差置

守ラシム白河結城義親ニ攻ラレ士卒多ク死シ

館モ破却ス金井ノ城ト云ハ古ヨリ井戸形ノ石

アリ故ニ名付今城跡ニハ龍神ヲ勧請ス堀越村

ニ在リ以テ堀越ハ即トモ云高野八郎ノ事ナリ

トソ

一新城村古墟ニケ所何人ノ居タルヤ詳ニヤス白

河郡岩瀬郡トノ界目ナリ然レ氏須賀川ノ二階

堂ニ取ラレシト有ニヤ二階堂續義ト云ハ盛義

ノ祖父ナリ須賀川寺社或ハ回家ニ傳ヘタル系

證上 白河殿

芳札今披見証意至推極後之方
府中付才年富之志在入之由理方
之良中受方為思測紀伊昔加威致
依之能之由他系考力一振致有由他
之由志自今以好之考力一之係法由
之考書而思之又使由之由考其考
万端自是為使之中入上之國考其考
府中置不能之考其考其考

治生共分 友原思行 押

證上 白河殿

一南御橋村羽黑館天龜二甲午年源義家朝臣始之
築于玉ノ下云後常陸大掾國香鎮之関物語ニ永
正二年佐竹氏ノ族大塚氏佐竹ヲ背テ結城ニ属
メ此城ニ居ク大塚系圖ニハ掃部少輔國久越前守
大膳大夫宮内左衛門尉ト四代居タリ宮内左衛
門尉ニ至テ佐竹ニ攻落サレト云フ佐竹ニ属
後ハ其臣阿野丹波守天野下野守柴田越後守石
川近江守田崎相模守相續テ居ル石川近江守ハ
石川昭光ノ親族ナリ仙道表鑑ニ芳名田村此城

ヲ攻落シ近江守討ル田崎ハ東館ヲ毛領シノリ
其子孫佐竹侯ノ臣タリト也

一板庭村古館 川下村古館 中野村古館 西川
内村古館此四ヶ所羽黒館ニ屬シ勢援ノ為ニ築
キシト云年代不詳

一中塚村ニ館カ岡館アリ湯本因幡守居ル因幡守
ノ後今其村ノ長ト云フ大永二年ノ比ニテハ白
川結城ノ番城タリシトシ

一中石井村ノ狐館江田八右衛門ト云人居セシト
也

一伊香村ニ油館アリ鈴木大藏居ル其前ニハ湯本
内匠之介居住ストナリ年代未詳

一関岡村ノ内天神澤古館佐竹ノ臣秋山七郎居ル
同村ニ関岡館ト云アリ中村大學正則居ル白川
ノ臣ニ中村民多シ入道道忠ノ時今ノ相馬ノ地
ニテ毛領セシカ其節中村民ノ臣アリシカ次第
ニ土地ハ狭ハミタ一氏中村民猶臣トシ南御ノ
内領セシナルヘシ又當基ナル人モアリ白河中
町高田屋伊兵衛ノ藏ニ

中村
孝亮

いふかきうきやうのすけ
の政の事ある急の
くまきくすまの
しめくすまの
しめくすまの

水正十郎

初

己ら初ひ

一高野村保木山館白川佐竹上戦争ノ時佐竹ヨリ
出張セシ館ナリト云フ

一東館村ニ東館ナリ結城ノ臣斑目十郎廣基共子
能登守居ス佐竹ノ為ニ攻落サレ佐竹ノ親族東
中務大輔義久同美濃守居ル義久此城ニ居テイ
ツモ佐竹ヨリ軍ヲ奥州仙道ニ出セシ時ニ先年
ノ大将タリ田崎氏モ此ニ居ルト云フ

一河内村物見峠館佳老山ノ北ニアリ結城ノ臣
斑目十郎廣基居ス

一赤館今棚倉ノ城北ニアリ何時ノ築城ニヤ鎖倉
大草紙應永ノ頃ニ見ヘタルカ始ニテ夫ヨリ白川
結城庶流ニテ居タルノ度々見ヘタリ文明年中
赤館源七郎ト云者居ル是モ白川ノ庶流ナルヘ
シ後白川ヨリ鹿子三河守ヲ置ク佐竹ヨリ攻取
テ和田大隅守及ヒ其子安房守為照ニ代テシム
又松野上徳次代ル慶長五年ノ乱ニハ佐竹義宣
ハ上杉景勝ニシテ合此処ニ出勢暫ク在陳アリ
安房守為照ノ子玄蕃丞ト云天正十七年伊達政
宗會津ヲ攻ム佐竹義宣ハ會津ヲ救ヒ改宗方ノ

此合戦仙道
表盤ニ出ツ

田村ノ大平ノ城ヲ攻落テ蕃ハ佐竹ノ先陣兼中
務大輔ニ送ヒ功アリ白川中町迄藤傳藏ノ藏ニ

与度お左平
城款と討捕走

与度お左平
与度お左平

与度お左平

天正十七年

与度お左平

和向言書卷之二

丹羽長重棚倉ヲ築テ移リ此城廢ス
一流村寺山館元龜ノ頃結城ヨリ深谷伊豆守治行
斑目能登守兩將ヲ置ク天正年中佐竹ヨリ羽田
攝津守ヲ大將トシ秋山横山等都合五百騎百日
程攻戰城中モ辛盡テ城ヲ明渡ス是ニヨリテ
秋山横山ノ二人楯籠ル天神澤ノ館ニ居ル結城
義親大ニ憤リ兵ヲ遣メ夜責ニメ夫倉ニテ攻登
リ門柱ヲモ切折テ無二無三ニ切入ケル郭内ニ
テハ急ニ馬ヲ切放ケケレハ馬共驚立テ突

ト白川勢へ向ヒ蹈荒ニケレハ寄手乱テ引退ク
其後羽田氏誤リ有テ呼返サレ切腹ス四家合考
ニ足利義氏朝臣ノ文書ヲ舉ク此時ノ事ナラン
細切言上竹入候抑越國云徒至テ上州令出張候依
之長尾一類兩三人致同ニ候指義無之候氏康松山
今在城及其備候間心易ク可被存候仍佐竹白河間之
義前日以代官言上之間以御使節被仰出候于今滞
留度々如注進者義昭堅固申拂之由無是非次第候
追日寺山城及雅義由候一途晴綱被加意見可然
候委曲瑞雲院可被申遣候謹言

十月廿五日

義氏

葦名修理大夫殿

今宮淨蓮院トテ常陸十二郡山伏ノ先達武勇アリテ武士ノ業ヲ事トセシ故佐竹ヨリ此城ニ置ケリ慶長二丁酉正月天下ノ山城停止ニ付山ヲ下リ館ヲ營セシヨリ城ハ廢セリ

一渡瀬村古館館主時代不詳

一富田村菅生館アリ菅生伯耆守居結城ノ旗下也赤坂郷ノ赤坂尾張守ノ分家ト云フ閑物語ニ菅生舎人友國居城不分明棚倉ノ押ナリ後ニ仙臺

一行トアリ棚倉ハ佐竹ノ押ナルヘシ元禄頃ニテハ富田ヲ菅生村ト云ヒシ也

一硯石村古館結城ノ臣徳積大學居ル地名ニ因テ硯石大學トモ云フ赤館合戦ニ案内者夕リ大功者ナリ天正十八年廢城ノ後同村峯全院ニテ死ス

一川下村松屋館船尾下野守滑津村ノ方ニテハ山城守ト云フ同

郡滑津村ヨリ隱居メ此地千石ヲ領ス天正年中佐竹ノ招キヨリテ佐竹ハ屬ス河上山賢瑞寺ハ船尾民ノ閑基ニテ位牌アリ

一 福井村 仲九館 往古田村 姓ノ人 築ノ田 村即田村氏
詳不 文龜年中 城代トノ 主將アリシト
断絶セシトナリ

一 釜子村 手城塚 館主 年代 姓氏 不詳

一 須兼村 物見 城昔 小針 山城 守頼 廣ト云 人住ス

一 川東田村 天王寺 山館 天正 年中 川東 田大膳 住ス

白川ノ 旗下 十リ 川東 田上 総守 城ト云 白川 臣ニ見

伊達郡 上郡 村農夫 所藏

然羽一以ノ 由出 馬込川ニ 存ス

外美 親江 條ノ 垣跡ト 不詳

中 有ノ 多ク 多ク 心 至ク

高 所ノ 多ク 五子 福以 異 存ス

高 所 跡 多ク 子 以 上 台 跡ト

凡 所 跡 一 種 多ク 存ス 跡ト

区ノ 一 種ト

川 東 田 上 塚 跡ト

政 宗

一 上野 手島村 御殿 跡 本多 彈正 少彌 住セシトナリ

白川ニ 本多 能登 守居テ 一時 分家 致サレシ事

白川ノ所ニ下リ其始此ニ住セラルシニヤ

一下野手島村坂本館館主年号不詳

一朽木村小屋館館主年号不詳白川親族ニ朽木右衛門ト云人アリ恐

此人ノ居館

一小貫村三城館天正年中迄藤若狹守居ル

一築森村城ノ越館館主年号不詳

一滑津村館舟尾山城守居ル天正十八年四月十八

日落城ノ其時地ニ方石餘白河郡兩野出島滑津

川東田二子塚小田川大田川泉崎松倉踏瀬新城

石川郡澤井赤羽新屋敷中野目明岡松崎神田中

畑外ニ川上川下千石隠居鎮ナリトソ

一踏瀬村上ノ小谷村館和田平内住ル長陳場館石

関館陳逸澤館三所館主年曆不詳

一太田川村古館三所アリ一ヶ所ハ結城ノ臣石射

迄江住ル村申酉方一所寅卯方一所館主年代不

詳

一太和久村館多賀谷左兵衛尉住ル結城ノ長臣ニ

多賀谷有ル下野國ノ結城ニモアリ此城永

禄年中ニ落城ト云フ石川岩瀬二郡ノ界ナレハ

須賀川ノ二階堂カ又ハ石川ノ石川家ノ為ニ攻

落サレタルナリ
一堤村薬師館角田伊賀守居ル紋ハ松皮菱ナリト
テ今モ村ノ鎮守羽黒ノ社箱棟ニ松川菱紋付アリ
ル

高野郡分合 南御戢附

高野ノ事ハ和名抄ニ白河ノ御名高野ト出シ又
一ヶ所ノ注ニ之良加波國分爲高野郡ト已ニ又
郡ヲ以テ称セシトモ見ヘ又中古高野ハ属セシ
ハ十八郷ニテ今ノ棚倉ヲ境トメ南九郷北九郷
アリシト也今ニ八槻明神田植祭ノ祝詞ニ明神
様ノ御田植殿様ノ御田植南郷九郷北郷九郷合
テ高野十八郷ノ殿原達一人モ不殘御出ヤレト
ト呼フ是ヲ田ウナヒ觸ト云又高野十八郷ノ殿
ハラ達ト五月女共ニ一人モ不殘御出ヤレト

呼フ是ヲ田ウハ觸ト云フ是久シク傳ヘニ祝詞
ナルヘシ白河七郎ノ藏ニ

白河高野岩瀨為積郡

石河田村依赤野保木

檢断事可合奉行給者

依國宣執事ノ件

建武二年十月廿二日右近好世監清言

親親ナリ

後林表ノ可為ノ殿

一南朝紀傳ニ斯波陸奥守家長ト相馬胤平兄弟建

武二年十二月廿三日高野郡ニ才井テ合戦アリ

判

陸奥國高野南郡内和泉守時知
泣奉為勲切者所被死リ也
早ク被知リシ世國宣所也仍
執事ノ件

那須記松野氏系圖ニ載ス常陸
外時知ハ八田知家ノ後也松野
高野ノ内高野ハ近キ地ナラハ
此和泉守ハ松野常陸介ニテ一
夕ニ此高野迄ニ合セ鎮セシナ
ルハニ

正文二年五月廿日信守常監者実事

上野ノ入居後

岩瀨郡矢吹村笹山武兵衛ノ藏ニ

陸奥國高野郡北方奉伊達宮内

大浦如状去未被河何移ノ事也

早可被沙法付納之由旨仰之
由極意以件

正元四年七月十日 越後守秀仲

越後守秀仲

親於下向

白河七郎ノ藏ニ

高野郡内伊香半澤

取口为石川郡野分

替之片管領之由仰也

何程甚由は

正元四年八月廿日 越後守

伊香半澤ニ付今見南柳ノリ
石川ノ内イッレノ村ト替ノ領セシヤ

越後守秀仲ナレニ外ニ此人ノ文書
多シ北畠親房ト共ニ關東トシ
人ナリ

越後守秀仲

仙臺白河氏ノ藏義詮公御教書

陸奥國高野郡事

仁 忠朝 備身并常

代為堵願等亦有相違

状以件

正元四年正月五日

西

越後守秀仲

顯於

終

義滿公花押

陸奥國高野郡事貞治
六年二月十九日安堵明鏡止
若白河右兵衛尉滿朝可令
領掌之状如件

明德二年五月晦日

陸奥國白河左高野郡
字多志石川左内番知行
地等事如元不可有

按笹川殿上テ鯨倉ノ滿氣御ノ第ヲ與
州官軍ノ威ヲ折カニ為ニ奥州安積御笹
川ノ下ニ其弟滿直ヲ岩瀨郡稻村ニ下シ
テラ志永六年ノ事ナリ其翌年ニコノ
旧料安堵ノ文書ヲ下サレタルナリ邊
笹川殿ノ花押也今ニ兩所ニ御所ト唱
フル館迹アリ

相違了状如件

應永七年四月八日

面

白河兵衛入道致

又岩瀨郡須賀川宿相樂七郎右衛門ノ藏

菊

去月廿七夜口高野郡
長福指合戦事追色
越具披了了西徒
教作ノ系以本少致
軍也ノ事奉會了抄河

此合戦考ル所ナリ

可江威原且々乃あ細

以涉使経美石留も

止傳しぬ純道めは

し月サる越は経を事仲

結城大藏左衛門

又水戸家家臣結城氏ノ藏

こちのくにきりののこを

北方

まがいののかののちけ

きりのいひんたのり

にんぶがのののののの

佐泰ハ唐橋肥後守也南朝紀傳ニ源為
定カ男也又修理亮トモ古書ニアリ

此ノものくんときめあまから
るきんのおんきあつにけりりき

よん(ま)をよのまいしにに

たのたにき(ま)のまの

かなんかのあひのちい

あつて(ま)のまに(ま)の

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

此合戦考所ナリ那須
郡武ニモ長倉ト云
地名アリ

仁公義村今棚倉村ノ
東北ニアリ

伊達系圖此八等
考ル所十三

まいきくしきりきりきりか
た〜い〜せか〜しきり
〜の〜

久人老ん字子七月十日

〜の〜の〜の〜景馬

景

高野郡口にお轉奉伊重之後の爲
恩賞流人成帯備旨成帯故同日

宣人相轉し履月以方被執作〜案被宣
失其旁り紀述被讀合々〜中〜物
可有斗山後且以另打渡事但〜
被如回宣了伊重は志奉り無慮物案
力恩賞流人成帯備旨成帯故同日
兄弟救案お恩案下子細しれ考付迄
匠教し上先被加對流且系〜被
被並談合行去之何々時分面〜被
切〜案七被案下し手澤は〜人
有被流人成帯備旨成帯故同日

以巧世可、系字子神也早加教法と

一のり、之由、伊之由、執事、女

女月中、

沙汰宗心

公明神録ノ銘ニ沙汰宗心
丁卯年号ハ志永十八年十月
十五日也

按赤館大倉左傳

此等ノ文書ハ皆高野郡ト稱セシ時ノ事ニテ或
ハ白河へ賜ハリ又ハ伊達へ領セシメ平賀景貞
ノ領ニ有リ藤藏人モ領セリ事實頗知ルヘシ伊
達氏ニテ此地領セシト絶テ知ル人ナカリシニ
文書ニ因テ昔ノ事ヲ證得タリ

一 鎌倉大草紙應永九年宮方ノ餘類伊達大膳大夫

政宗法名圓孝隱謀ヲ企テ篠川殿ノ下知ニ隨ヒ
不申一味同心ノ族蜂起シケル同年五月廿一日
上杉右衛門佐入道禪秀為大將叡向ス伊達憲ヲ
ヨリ赤館ト云所ニ城ヲ構ヘ合戦ス鎌倉勢ヲ追
返シ盡ク討取ケル然レ進國ノ大勢カサ子テ馳
向ヒ九月五日伊達打負ケ申ヲ又井テ降参ス
九代後記南朝紀傳ニモ
此赤館合戦ノ事ヲ記ス

按赤館ト云ハ今棚倉城ノ北五六丁隔テ、遺
墟アリ是也是時笹川ノ御所ヨリ軍兵催サレ
シ文書白河七郎藏ス此文書ニ據レハ應永七

年ノ事ニシテ九年ハ大草紙ノ誤カ

會津四家合考ニ伊達家譜ニ云ク改宗應永二年

乙亥九月十四日薨壽年二歳早東光寺殿儀山

田孝此文書ニ授レハ平年誤アルニ似タリ

同書其各系圖ニ滿盛子ニ年代ヲ以テ考レハ鎌倉氏

滿ヨリ滿ノ一字ヲ賜ハリシ人ナレハシ

藩翰譜ニ改宗平年ノ事ヲ新續古今集ノ選述ノ

事ヲ引テ誤リヲ免シ置テ

伊達大膳大夫入道田孝華名次

即左衛門尉滿盛未隱謀事依

露頭已迹下之上者不日可被加

返洛也早可致忠節也恩者

依切不可有涉計ニ状如件

應永七年三月八日

花押 滿貞也

此合戦アリテ滿貞朝臣ヨリ鎌倉へ告ケ玉ヒ滿

兼卿ヨリ感書ヲ賜ヒシニヤ同ニ職ニ

奥州凶徒對洛奉致忠節

系書以神妙也向及添立抽

戰印ニ状如件

應永八年二月廿九日

花押 滿兼卿也

文書ト地畷トニ因テ考ルニ上杉ハ定テ常州ヲ

徑テ南方ヨリ向ヒ白河結城ハ笹川御所定利四

郎滿貞ニ從ヒ北方ヨリ挾テ打タルナルハ三故

ニ伊達氏モ遂ニハ打負ニテ一カ伊達氏ノ高

野ヲ失ヒシハ此時ニテヤアリケン

伊達氏ノ世臣ニ高野氏アリ高野郎ヲ領セシ時ノ臣ニヤ再問ヲ庶幾メ未夕便ヲ得ス

サテハ跡ハ悉ク白河ノ領トナリテ有シヤ
一拾芥抄年環翠軒節要集ニモ高野郡ノ名ハ見ヘ
タリ叔佐竹氏勢熾ニニナリシ頃別部ニ出シ夕
ル依上ノ地ヲ白河ヨリ斬取下野那湊郡茂武^ホノ
郷ヲ那湊家ヨリ斬取

按那湊記ニ茂武御ノ武士皆佐竹ニ屬シ烏山
近ク迄攻寄スルノ度公見ヘタリ今ノ水戸御
領下野ニ及ヒタルハ佐竹氏ノ時ノ境界ノ倭
ヲ領シ玉フナルヘシ
其勢ヒ席ヲ卷ク如ク遂ニ高野ノ地ヘモ兵ヲ進

佐竹敵対ノ頃北条氏
康氏政父子ノ音信往未
ノ秩ニテ佐竹ヲ討クニ也
書簡教通澄古文書ニ
載ス

メ白河ト戦章数年ナリシト見ヘタリ結城義綱
ノ時迄猶一カヲ以テ佐竹ト雌雄ヲ争ヒシカ晴
綱義親ハ芦谷盛氏ノ助カヲ頼ミ義親ハ芦谷ノ
軍トナリ援兵ノカヲ借テ漸ク高野ヲ持コラヘ
ラレシカ盛氏モ死去シ赤坂ニテ攻取ラレ一度
生虜トニテ成テ赤館ヲ畧ヒ佐竹ニ領セラレ佐
竹ニ服シテ石川昭光岩瀬郡ノ二階堂等ト共ニ
佐竹ノ先キノ會津ノ芦谷ト共ニ安積田村ノ邊
ニテ打出テ伊達ト争ヒタリ土人ノ説ニ大永年
中誓ク高野ハ芦谷盛氏ニ屬セシト云ハ盛氏白

河ノ加勢ノ度々佐竹ヲ防キシ故ニ盛氏ハ屬セ
シトハ口碑ニ殘リタルナルニ其戰争ノ時佐
竹ニテ斬取ル時ト高野郡ト呼ビ白河ニテ取戻
セハ白河郡ヲ以テ呼ビテ唯南御ト稱セシ故ニ
郡名ノ分合スルノ度々ニテ紛々タルナリシ
トナシ是ハ八槻大善院隱居然ルニ終ニ和名抄
此墨齋ノ説ヲ記スノ時ノ以前ノ如ク高野ヲ稱セテ白河ノ中ニ復
セシハ寛文中白河城下兩空山龍藏寺ト八槻
大善院ト霞同行ノ事爭論アリシニ追々手廣ニ
ナリ終ニハ兩山ノ坊官先達越家等江戸へ召出

サレ宗義ヲ紀サレ郡中支配ノ義ニ爭論相及郡
名ヲモ上古ニ復サセラル寛文八戊申十二月廿
六日御裁許狀ヲ兩山へ渡サル此義ハ天下修驗
ノ大獄訟ニテアリシトナリ故ニヨリテ

將軍家御判物寛文五年ニテハ高野郡ヲ以テ稱セ
ラレ貞亨二年以後ハ改メテ白河郡トハ書メ賜
ハル左レハ郡名復古ハ寛文八年ニテヨソ有リ
ケル今依上ノ境ニ高野村アリカウヤ村ト讀ム
是御名郡名トナルノ本也

一関八州古戦録佐竹常陸公義重奥州ノ地ヲ畧セ

ニカ為陸奥常陸ノ國境南郷ト云呼一テ出馬也
セラル是ヲ聞テ芦名盛氏入道止々齋子息平四
郎盛相共軍ヲ發シ白河ノ結城左衛門佐義親ヲ
巨魁トシテ彼地へ出張姑ク對陳アル標葉郡手
越ノ相馬彈正少弼盛胤石川郡泉ノ石川大和守
昭光昏議シテ双方へ媾ヲ入ラル佐竹初ハ同心
十カリケルカ下妻ノ多賀谷ヲ攻ントテ北条氏
改近日小田原ヲ首途ノ由風聞アルニ付テ義重
多賀谷ヲ救ハント欲シ盛氏ト無事ヲ作テ互ニ
軍ヲ收メラレタリ太田三樂父子一方ノ部將ト

シテ南郷表在陣セシカ和談事成テ双方振旅ノ
砌ニ至テ芦名ノ先隊佐瀨源兵衛ト無二ノ旧故
ナレハ老後ノ義十ハ今生ノ暇乞ニトテ面會
シ又此時ノ軍ニマ出陳ノ前ニ八槻へ祈願ノ書
ナルヘシ大善院ノ藏ニ

南郷本意ハ未停香之内務山平六帝
思ハ地可クハアキ形ノ以内波ノ地ヲ渡ル
多ク程早ク入奉書也旅新念テ為肝
要ハ為後日一筆書ク也

永禄九年丙六月吉日

本 芦名盛興力

一會津四家合考

一會津四家合考

一會津四家合考ニ一年盛氏佐竹義重ト南御ニテ
對陣也互ニ合戦有ルヘキニ定ケル佐瀨源兵衛
作候ニ出ケル敵陣ト味方トノ間ニ小山下リ
會津勢ハ彼山ノ彼方ヘ打越テ合戦スヘキ場也
思ノ外敵陣遠ク引退テ備ケレハイヤク是ハ彼
小山ノ陰ニ伏兵ヲ恐ハセテ此方ノ勢ニ深入セ
サセヨカラニ折ニ起合テ跡ヲ遮リ伐ニト謀ル
ニコソト思テ細ニ猶豫見レハ案ノ如ク混甲三

石程茂ニカ陰ニ隠レ居タリ源兵衛能見濟テ引
返シ味方ノ陣ニ堅ク下知ノ靜ニ扣工居タリ佐
竹ノ陣ニハ太田三樂齋カ居テ深ク行ヲ藏メ計
ケレ氏源兵衛カ淺ク見透メ其圖ニ落子ハ佐竹
勢ハ今ヤト下待無テ徒ニ機ヲ費ス餘ニ時刻移
ルニ因テ三樂齋作候ニ出テ見ニ會津勢ノ陣
ノ張様疾ニ此方ノ行ヲ見透シ中々思回ニ落ヘ
シ氏見子ハ三樂カ深キ計モ徒事ニ成タリ三樂
ハ小高キ所ノ辻堂ノ縁ヘ上テ坂踏鳴シ扱モ無
念ヤ今日ハ場ヨシニ扣タレハ敵ヲ深クト引受

思圖ノ勝軍セント手ニ取ル様思ヒシニシ
者ノ源兵衛ニ行ヲ見透サレタレト口惜サヨト
テ独言セント云カ如何思直ケルニヤ源兵衛ト
多年無二ノ知音ナレハ幸今日見参申メ此比ノ
事共物語致度ヨリ候ヘト使メ言越ケレハ源兵
衛モ心得タリト返答メ頓テ鎧ヲ脱スハ夕ニ成
歩者三十人許召具メ猶豫モナリ三樂カ方へ馳
行互ニ近ク居寄テ越方此頃ノ事共打語テ時
刻ヲ移メ引別ル源兵衛味方ノ陣へ歸ケレハ親
キ者共立湊テ叔モ先程ヨリ無心元存候ニ無

恙御帰ハ目出度候扱スハ夕ニテ然ニ歩者計具
サレタルヲ餘リニ輕々敷覺候騎馬ノ二十騎モ
三十騎モ召具セラレハウ候ヲト言ケレハイヤ
左ニハ非候我三樂ト多年無二ノ知音ナレハコ
ソ今此互ノ戰場ニテ對談セント言越タレニ鎧
着テ何カハセニ万一二樂方便寄テ討氏近ク不
寄ハ我不可討寄程ナラハ彼法師トト指遣テ
アルヘキ左アルハ會津ニテ源兵衛佐竹ニテ三
樂齊五ニ死テモ損モナシ若又歸サニ討ナラハ
尋常秘藏スル此用ソ彼一物ニ一鞭當ル程ナラ

誰人々追付ニ見ルニ樂齋坊ハ事々シク鎧武者二十人計並居サセ我身毛透間十少ヨ口ヒテノ對面ハ今更恥敷候ハニト會款ニケル彼力推量ノ如ク三樂モ今日鎧十カテ源兵衛ニ對面ノ一生ノ耻ヲカイタリ我形勢ヲ彼力盛氏へ有ノニニ語ニナリ耻カシケレトテ深ク悔ケルトナリ

一棚倉ニ傳タル丹子ニ佐竹義宣力謀ニテ赤館ノ鹿子三河守白川ヲ降参十廿ニム此事若名盛氏聞テ大ニ怒テ南郷ヲ水攻ニセントテ玉ノ堰ヲ

堀切夕リ今根小屋川ト云フ義宣ハ赤館ニ羽田攝津守松野上總介那須郡茂武御ニ佐竹ハ屬流館ニ常陸十二郡ノ先達今宮淨蓮院ヲ差置攝ノ羽黒館ニ河野丹波守石川近江守石川大和守田崎相摸守佐竹親類今大塚越前守天野下總守柴田越後守家老矢吹左源太大塚大膳狐館中石江田八左衛門油館ニ伊香鈴木大藏石館ニ石ケ作村秋山七郎岡館ニ中村大學保木山館北岡岡村東中務太輔東館ニ東美濃守ヲ差置千石館今岡村ニ富岡若狭守ヲ差置其外ノ館々諸士ヲ差

置少此時ノ境ハ久慈川ヲ境ト西小馬兼川東ハ
大草川ヲ界トス也

一仙道表鑑天正二年ノ秋佐竹常陸公義重石川太
和守昭光牒シ合テ四千余騎ヲ率シ仙道表ヲ掌
握セシトス義重ハ棚倉へ出馬シ南御寺山羽黒
ノ城ニ人数ヲ籠置キ近々仙道へ出馬ノ白川須
賀川田村等ノ城々ヲ責落シ其威ニ衆ノ會津ヲ
平ニ入ヘシト其支度夏中ヨリ會津へモ聞ヘシ
カハ人ニ光ヲセラレシヨリハ逆寧ノ戦ニ逆
テ芦名修理大夫盛氏嫡子判官盛白^共河大藏少輔

義親大藏少輔ニ任ス
ル下他書ニ見ヘス

田村安藝守隆頭嫡子大膳

大夫清頭父子一味ノ都合共勢一万三千余騎高

野郡へ茂向ス二階堂遠江守盛義^{岩瀨郡須賀川}

^{照行}子^七濱尾筑後守湊田美濃守^千余騎ヲ指添

テ加勢ス佐竹勢會津ノ旗先ヲ見下均シク大鼓

ヲ打テ攻掛ル武州岩築城主太田美濃守資正入

道三樂齋道譽共比佐竹ニ屬メ在ケルカ六百余

人ヲ引率一陣ニ追進メ佐竹中務少輔義久ヲ

始トメ諸貫大藏少輔河合甲斐守大繩式部少輔

茂武左馬助^{那須記ニ那須郡茂武ニ茂武上徳分}

^{守綱ト云人佐竹ニ屬ス共族ナリニ}

同但馬守平井薩守二千余騎ニテ道譽ヨリ跡
ニ押續キ會津勢ニ打テ掛ル芦谷方ニハ佐瀨源
兵衛本名左衛門佐沼澤出雲守鶴浦甲斐守中ノ
目式部大輔等先登ニ進ニテ唯雄ヲ爰ニ決セシ
トイトミ戦ケルハ互ニ勝負ハ見ヘサリケル芦
名盛興ト由村清頭ト父子馬廻リノ勢計モテ寺
山ノ敵ヲ押ヘテ居ラレシカ雜兵少ク出シテ敵
地ノ作毛ヲ薙捨テ取シトセシ所ハ佐竹方石川
千石板橋澤尻下川邊ノ一類等按皆石川ノ親類
川郡トナル板橋澤尻川邊ハ皆石川掃部助ト云
人ノ領夕リシト有リ川邊ニ雲鳥ノ城トテ城迹

アリ後ハ高山ニ連リ前ハ平田廣野ニ臨ニテ甚
ク地理ヲ得夕リ石川郡泉ノ石川ノ親族ナリ
二年ニ成テ二年計ヒ夕ト付從ヒ喰留ケレハ
盛興ト隆頭ト一同ニ引返ノ相戦隆頭兵ヲ下知
ノ旗下共ニ崩懸リテ自敵ニ相當リ七顛ハ倒メ
戦レケルニ石川方突崩サレテ羽黒ノ城主石川
近江守ト云モノ討レケリ其外究竟ノ首數五十
三雜兵五百余人討レケレハ石川千石等悉ク敗
北メ引返シ盛興則生捕十一人有り首五十三級
ヲ相添田村父子働ノ次第父ノ許ヘ委細ニ云送
リレケレハ盛氏悦喜不斜隆頭ノ元ハ佐瀨大和

守ヲ使者トシ今日ノ御年柄感心不少ト禮謝セ
ラレケル所ニ隆顯以ノ外病惱ナリ陳中ニ夕ニ
ラズ二三日カ間ニ田村ノ地ヘ引退テ養生医薬
ヲ盡サレレ氏不叶天正二年九月六日卒去下ル
按此合戦ニ盛氏ヨリ鶴浦入道トテ會津ノ留
守セシ人ヘ贈ル書簡ヲ四家合考ニ載ス
爰元牀敷可有之候尚一戦様子聞度可取置候
具申候寺山清顯盛兵馬四以テ押置羽黒及行作
毛苅引除候所敵二千追添候返合押崩山追上
以外木立候上多打留不申無念候其上若者共

早返而如之候驗五十二生取十一人其家内十
余人打捨五百余人打候南御佐中遂一戦如之
事光子本望無申事候御大慶令察候次之日羽
黒及備候一人不出候上馬上折立兩城無残作
毛田畠刈捨候兩日搥刷搥刷共懸御目度迄候田衆
寺山虎口之仕合被申候是見事之刷不及是非
迄候尤一人午負等無之候只尔大切搥程面白
物若無之候亦自那湊大関石騎計打越候座敷
之前軍申勝候一期之本意迄候未那湊与力之
儀左馬候亦去二十日八丁目二本松塩松少

少芥田與力之由申候如之、上行未如何様成行
候令窮窟迄候輝宗千騎、不足八丁自來五百
騎申候亦岩崎町前早々入馬念望候恐々謹言
隆頭病氣以外候二三日申由打越候

八月廿四日

止齋

鷓浦入道殿

一會津四家合考、或時盛氏ト佐竹義重ト南御ニ
テ對陳也佐瀨源兵衛物見ニ出ケルニ其地敵ハ
場ヨシニテ味方患所ナルニヨリ今日ノ合戦ハ
延引セラルヘキノ由本名奎丞ヲ使トメ盛氏ハ

申ケルニ左アウハ汝其旨諸手ハ觸ヨトノ下知
ナレハ段々ニ觸行処ニ其比ノ風俗ニ諸牢人共
寡合同志ノ一隊ヲ備ルヲ江湖衆ト云是唯武士
道修行ノ為ニ江湖僧ノ如也ト云義ナリ彼江湖
ノ者共ニモ大将ノ觸ヲ傳テ引取セントスル処
ヲ敵ニ喰トメラレテ物分レシカヌル故ニ奎丞
モ取テ返シ共ニ敵ヲ追拂ケルヲ盛氏旗本ヨリ
見給ヒ物ハ本名メカ法ヲ破テ軍スルカ患キ奴
哉トテ怒ラル盛氏ハ勝テ軍法密キ大将ナレハ
彼者法ノ如ク言付ヨト源兵衛ニ下知セラル故

源兵衛人年ニハ懸申テシトテ自馳行キ兔角
シテ逐天セサス其後車ヲ分明ニ申分ケケルハ
扱ハ歸參セサセヨト許サレケル

依上ヨリカミ

一和名抄白河郡ノ御名ニ依上アリ今ハ常陸國久
慈郡ノ内ニ入テ保内ト云四十余ヶ村アリ中古
依上保トテ保名ヲ以テ呼ビシ故ニ今保内ト云
ナリ今文字ヲ寄神トモ書ス保内ヲ常陸ノ疆界
ニ収メシハ恐ラクハ白河結城ノ領地ヲ永正頃
岩城氏攻取リ保内ノ都会大子ノ城主芳賀氏ヲ
モ降参タリシト常陸國誌ニ載タリ其後又佐竹
氏ノ有トナリソノ時ヨリ常陸トハ成タルナル
ヘシ今此保内ノ東西下野ノ國へ出テ常陸ノ小

野ノ郷ニ出ル所ニ塚明神ノ古祠ヲ存シ夕リ古
ノ國界ニ明神ノ祠ヲ建ル其緣由ハ如何ナル
義ニ拠リシヤ詳ナラ子氏我奥州ノ界ノニニテ
常陸ノ國中ノ界ナラ又地ニ塚明神有ヘキ理ナ
ニ是又依上ノ白河郡夕リニ遺證トモ謂ヘシ白
河七郎ノ藏ニ

當國依上保令知リ清年負各
情急可多致馬所佐夫依
了系上啓如件

建武元年三月十日 老少辨判

宗廣晚年
宰相中將ト

依上 陸奥守中將殿

判

依上保令有清知リ事編旨め此
先道子所招人作官年負不致失
指下長加市知々々 國室候也仍執
如件

建武元年四月十六日 左花槍中將清高

上野入道殿

陸奥國依上保金系

保内河老内金山御赤
力初切賞の事なり

去

三ノ家ノ子成ノ事ナリ

建武三年十月廿日 大孫左 花押

結城守河老の館

白河高野岩瀬水積郡

石河田村庄依上小野保赤

檢断事可令奉新録者

依 國家執事如件

頭朝ノ赤載タル道忠該状ニ赤河國
渥美郡ノ御ニ道忠領ニタル赤河
守ニ任セラレタルハ此等ノ事ナリ

建武三年十月廿日 右近將監清高

結城赤河前日殿

右ノ如ク白河結城へ賜ハリケルカ佐竹ハ元ヨ
リ足利方ナレハ結城ヨリ攻取シニヤ一度ハ又
佐竹ノ物トナリ其庶流依上三郎宗義カ領セシ
ニ應永廿三年於鎌倉上杉禪秀謀叛ノ持氏ハ敵
セシ時宗義ノ父佐竹初ハ山入氏ト稱ス上総入道
嫡子刑部太輔祐義舎弟尾張守玄義等禪秀ニ一
味ニ夕リ禪秀亡テ後降参ス又幾程モナリ應永
廿九年十月三日上総入道家督ノ事ニテ持氏

ノ不審ヲ蒙リ比企谷ニ在ル上杉淡路守憲
直ニ仰テ討シメラル佐竹法華堂ニテ自害ス
大草紙鎌倉物 依上三郎宗義父子ノ間ナレハ
同意ノ罪ヲ蒙リ所領ニテ離レシメヤ又白河彈
正少弼氏朝ハ禪秀ノ亂ニテ持氏卿ハ屬ノ鎌倉
ニテ合戦シ又亦鎌倉大草紙故ニ佐竹ノ缺地ヲ白河へ
賜ハリシナルヘシ仙臺ノ白河家ノ藏ニ
陸奥國依上保内依上三郎
庶子分事所充以也若早
守先例可波沙沃之快

氏親

如件

應永廿五年六月十三日

印

持氏卿花押

白河彈正少弼取

陸奥國依上保

佐竹依上三郎

事

為判所ノ預置也於有限年貢
者但先例可波沙沃之快如件

應永廿五年九月廿

印

同上

印

白河彈正少弼取

右ノ領地賜ハリタルニ因テ管領上杉憲實へ進
物ヲ贈リシニヤ憲實ハ應永廿五年養父上杉憲

永ノ跡ヲ継キ安房守ニ任シ此節ノ執權タリシ
同人ノ藏ニ

依上保涉判法御殿

目方ハ何カ正唐毛糖毛

給ハテ既新他事御存

信公ノ御子

六月二日 友原寛家子

謀上 白河浮正ノ御辰

其後ニ鎌倉大草紙ニ下ル應永三年白河へ打出
タル南朝ノ餘類里見刑部大輔ノ依上ニ在テ戦

争アリシニヤ事實詳ナラサレモ我藩家士佐藤
市兵衛ノ藏ニ

今夜お依上城攻力有由

里見刑部ノ情所得也尤

以神妙活劬戦功者御賞

之状如件

應永世五年三月六日



持民御花押

津井六郎重

於依上城今戦被底ニ乗テ
以神妙向後不可抽戦功也

如件

正長弘治二年七月廿七



海井高直

於信上城被合戦果志以戦功進丹波抽
里見刑部少輔討亡軍切了御喃新筋
有る事下出素代事其御軍中出後
上京州ゆ如件

正長二年八月十九日



海井高直

又年代ハイツーノ頃ノ文書ニヤ未夕依上ノ白

河鎮夕リ三時ノ事ト見ユル源義行

此人ノ白川

一典へ夕ル書水戸ノ結城家ニ藏ス文中ノ生瀨

袋田ハ共ニ依上ニ在ル村名ナリ

生瀨三ヶ村袋田放

志事目録及以向

あり新湯人勇以り

大なる勇牙あ細戸

方放中下りる如け

今中ハ以り後記

十有十日源義行用

澄止 小字後

然ルニ何ノ比ニヤ佐竹ノ物トナリ永祿天正ノ
比佐竹トノ戦争ハ依上ノ此方ナル白河郡ノ南
郷ノ地ヲ次第ニ蚕食セラル衣上ヲ失ヒニ事ハ
書傳廿ハモ十ク白河ノ堺中タルハ知ル人モ
稀ナルトハ古今ノ變遷ノ様ニ付テ茫乎トナリ
又ルハ文献ノ乏キ故ニコソ天文ノ頃ハ早八溝
山迄常州ト稱シ當今ノ形勢トナリシト見ヘテ
八溝山下ノ坊鐘ノ銘ニ曰ク

唐有八丈溝矣常州八溝山亦據此境得名乎寺曰

南院須闕苾芻申百八鐘色若久兮故化緣苾芻兒
鐵鞋不倦霜平雪苦募十方衆緣功情命鐵匠鐵洪

鐘成就揚雲興岫求我願既滿之語因為銘其詞
曰常陽勝境 八溝山雄 絕頂安立 大士圓通

作家手改 層稜鐘洪 煉碧眼鏡 脫白丁藪
上界下界 尊躬下躬 壽傳萬代 功響無窮

天文竟集戊戌冬十月^{七年} 吉辰謹銘佛日增輝諸
天威從銷魔外降

前福源晨初叟比丘周腫書乎平等下
皇帝萬歲重臣千秋風調雨順國泰民安

大祖那源朝臣義萬也佐謹白因慈雲寺法印宥
意別當善藏坊 松溪齋昌訓 勸縁江州住比
丘居妙心 小聖善心并妙善 大工石井靜阿
弥奥州白川大檀那藤原朝臣直廣 地頭深谷
頭衛年重安 金藤掃部助
慈雲寺ハ依上ノ内町付村ニアリ真言宗ナリ頭
衛ハ佐竹ノ臣町付村ノ内館跡アリ町付昔ハ黒
澤ト云フ〇掃部助モ佐竹ノ臣常州上ノ宮村ノ
内野瀬ト云所ニ館迹アリ

竹貫

白河郡ノ内ニテ岩城ノ菊田郡石川郡ト界ヒ山
高ク谷間ニ村落十三村アリ本六村ヲ分ク十三
村トス竹貫村其才ヤ村也竹貫氏数世是ヲ領ス
其系圖ヲ民間寺院ニ求ルニ有ルヲ無シ光ノ字
ヲ以テ名乗リトスハ石川氏ノ族ナルヘシ中
頃一旦白河結城ハ賜ハリシ白河七郎藏ニ

沸判

下 石河店

可令早結城上野入道忠領知當店

内鷹貫坂地矣

若人令知の波不守先例可致沙也

状印の件

建武元年四月六日

坂地矣澤ハ今モ石川郡ハ村也竹貫ハ續キ夕ル地ナリ

一明德ノ比竹貫三河四郎光貞ト云人アリ石川郡

須釜大安寺由緒ニ石川大寺安藝守光義入道

悦ト光貞ト吉村ノ地ヲ年事アリ由緒ノ文書ニ

大寺安藝守光貞竹貫者河四郎光貞相論

石川郡吉村ノ事道恒所申敷者生謂云

早任代ノ可致領事状如件

明德五年七月一日 左京右史判 吉良貞宗カ

天文頃ハ竹貫氏石川ニハ属セス岩城ハ附夕リ

岩城ハ下総入道可山ト云ヒニ親隆ノ親隆ニ人

ハ殊ニ武威熾ニノ常陸國モ多賀郡ハ全ク改取

久慈郡ハモ年ヲ掛ケ佐竹氏モ地ヲ感ノラレニ

程ノ人ナレハ此人ナントノ世ニ竹貫ヲモ服セ

ニニヤ白川愛岩町佐七ト云者竹貫ノ者ナリ横

川氏ニテ文書ヲ藏ス

此田原谷橋... 一段の橋... 十六十一あり

同日... 竹貫三河守... 重隆

四家合考岩城系圖
岩城在京大夫重隆
山ト云

竹貫三河守
橋川右馬助

此田原谷ハ田村郡ニテ岩城ヨリ兵ヲ出ス要路
ニノ重隆ノ孫左京大夫常隆天正十七年伊達改

宗朝臣ト戦ニ為ニ仙道ヘ向ヒシ時モ先ツ一番
ニ田原谷ヲ攻落セシト會津四家合考ニ見ヘ夕
リ竹貫三河守重光ハイツモ岩城ノ先キトシテ
仙道ヘ打出夕リ中ニモ天正十三年安積郡高倉
合戦ハ佐竹岩城芦名白川石川ノ諸將伊達ヲ攻
打奥州ニ於テ稀成大合戦ニ竹貫三河守ハ猶預
モセス一陣ニ進テ已カ精兵ノ午夕ト共ニ下知
シケルハ敵ノ真先ヘ進ムハ足輕ノ雜兵也必表
十ル者ニ目ト懸ク唯操矢拳ニ高ク指上翔鳥ヲ
射様ニ飽ニテ引テ一度ニ放セト前後左右ニ心

ヲ賦テ下知シ夕リ本ヨリ握リニ餘リタルカニ
ホコヲニツク打テ猫潜リナト云大狩侯ノ矢束
普通ニ勝レタルヲ矢継早ニ射出ス程ノ手利共
六百余人一度ニハツト放ケル敵モ物オケメ
今迄勇進タル者共ハヤ後口様ニ成テ見ユレハ
竹貫スワト下知メ拔連テ切テ掛ル中ニモ窪田
十郎ト云者ハ茂庭左月ヲ逐掛テ組タルカ安
ト取テ押ヘ首ヲ擡ク三河守モ能敵討テケリ
守ノ臣水野勘ケ由左衛門ハ殊ニ勝一ケル強弓
ノ射手ナリ今大久田村ニ水野清左衛門家ニ彼
カニホコヲニヤ外竹ハカリ内丸木ニ削立夕ル
一寸余ノ分厚ノ弓ニ籠ハキノ大指ヨリモ太キ

ニ差直シ六ナニ余ル大ノ侯實ニ鎮西八郎ノ弓
矢カトモ思フハカリナラテ屋棟ニ箱ニ入レ結
付置ケリト也行テ尋子ニ主天正十七年伊達
人アラスノ只箱ノ見夕リシ天正十七年伊達
政宗朝臣ハ三河守ヲ味方ニ招キケレ氏忠ヲ守
リ敢テ岩城氏ニ背サリシ須賀川落城ノ時二階
堂ニ加勢トシ岩城ヨリ植田但馬守水野中務少
輔ノ三河守也罷越宿ヨリ三丁程打出牛袋川大黒石
ノ須賀川ノ邊ニ支ヘテ待伊達勢矢文ニ成ニケル
ハ竹貫力手ノ者共強弓ノ精兵水野勘ケ由ヲ初
トメ六百余人矢種ヲ不惜差詰引詰散々ニ射ル
伊達信夫ノ兵夥敷射殺レキ負死人篋木ヲ乱ル

如ク入塚築テ累々夕リ然レ氏謀叛人アツテ城
落夕リケレハ中務少輔栗谷澤ト云所ヲ落行ヲ
但馬守ハ早討死シタルニ鬼神ノ如ク沙汰スル
三河守ノ子息ニテ何國ニテ引玉フト旬リ追欠
シカハ朱ニ染タル太カヲ真甲ニサシカサシ駒
ノ鼻ヲ引帰スト見ヘシカ敵ニ騎切テ落シ大勢
ニ渡合終ニ打死シ夕リケリトノ三河守ハ十カ
ラヘ有テ天正十八年太閤秀吉公竹貫ノ地召奉
玉ヒ岩城ノ富岡へ移ル慶長五年関ヶ原乱ノ時
寂上義光ヨリ寂上手ニテ會津勢ヲ攻破リシ

詳ニ書簡ニ記ノ三河守ニ贈ル四家合考ニ載ス
一山上村ニ竹貫氏菩提所廣覺寺ニ竹貫歴代碑十
ニ基アリ先臣箭田和泉ノ子孫所建ナリ寺ニ遺
物鞍轡文庫短刀類アリ竹貫四家老ヲ矢吹箭内
小野岡部ト云シトナリ

一竹貫八千石ノ地歴代夕モ千シカ後ニ流浪ノ旧
領ノ者ニ養ハレ在シカ仕官ヲ志メ三河守重光
ノ孫權太夫此地ヲ去リ其後ハ音信モ無カリシ
ト也別ニ臨ニテ入り山上村庄屋へ遺スニ品有
リ讓狀ニ云リ

ゆつりぬ事

一 小たち

神あり詠日たり一

一 三かんゝ葉谷

山日三テ日ゝ葉谷せん

其れ若左若くふあせりせん

下其れあはつていん半々判

若く其れ夜江戸に形あす其元ハ由川ノ下

ち切らつて一ちく一室あてて改め

明曆二年己三月

竹葉檀吉史

橋本治太郎

一 此郷松川村内小名横川ニ住ニタル横川氏ノ後

今白河町佐七藏ニ

踏進りて自も主人に招請し下り岩城

白紙三ツ下同

赤釣、張るて其れ毎以てあめり首尾尚光誰人ハ其子

三浦合穂宗事りあて候中又魂解 清息

左より進四良及お持り候底 係々 取左候

不の ち更くしてつけり石川

ありあは候中其れ候亦候要人始夫年中お積

口ハ支岐出候 風をさす時分り言は

泉石川氏ノ所
居十六石川氏カ

牧野三芳ハ所ノ内ノ領
セシ人ヲ雜存文書中ニ載ル

石河氏ノ自牧堂ヲ傳
奉テ有知リ候所

十月廿六日

白河本兵衛ノ存

紫證トス

おる山初ノ文ヲ頼系奉事ノ如ク

至練下ノ合ノ御白東口ノ合子田ノ付録

ノ於年中ノ言ノ得ル事ヲ委由泉十郎及結

以上ノ對證ノ略字ノ為ノ備

牧野三芳ノ家ノ實録

横川氏ノ存

柳ノ友

ノウノ年

ノイノ村

公志人

存ノ川

ノ村

ノ

ノ

ノ

あ

ノ

ノ

ノ

人 山道

右永年丁亥十二月吉日

横川助之丞

堀内

徳用一岩の標石中 古時分以て方鉄

半所會

但乃也

此の法は石の取手

波留の石を流石流秘書の中より細

按鉄砲の型はアッ
カリの時贈り書
筒に似たり隆
誰人ヤ

注取く細先の白石の記を鉄の付手
理の能を流石に依りて流石の石の取手
記

より

隆綱 為

横河の石の取手

一 鎌田村観音堂山に石碑阿部貞任ノ為ニ建ツト
云年号ハ嘉曆十リト也又同村ハ幡宮石階下ニ
嘉曆三年四月ノ字枕文ノ下存スル碑アリ

赤坂

赤坂ノ御六ヶ村アリ別ニ常世赤坂ト云地アリ

是ヲ山野赤坂ト呼トナリ常世赤坂ハ草高三千

石アリ中野村ト云所ヲオヤ村ト云赤坂尾張守

トテ藤原姓ノ人教世住シ民間ニ其類族多シ菅

生氏ト親族ニノ結城ノ臣夕リ後ニ佐竹ハ降リ

又中野村ニ館迹アリ禪宗惠命山長遠寺ニ位牌

アリ

茂林院殿天文元年赤坂下総守藤原常道

惠命院殿長遠常久天正元年赤坂下総守藤原常久

清巖院殿 慶長元年赤坂助七郎藤原道貞

玉山院殿 元和三年赤坂下總守藤原常通

赤坂城代八舟木大隅守橘光辰其子掃部常全也

又赤坂七騎トハ佐藤典左衛門常信緑川筑前守

信貞芳賀帶力正光森筑後守光時蛭田帶刀常吉

高木伊賀守重直ニ舟木ヲ合ス

按竹貫郷ノ入山上村岡部次郎左衛門藏ノ古

軍書跋ニ天文廿三年正月吉日舟尾拾郎平隆

相~~取~~トアリ又別卷跋ニ船尾安房守平隆相ト

アリ赤坂ノ隣郷トハ大隅守ノ親族ニヤ

美御帰八目出度候叔不ハ夕ニテ然天歩者計具